

この号にも、すばらしい原稿を多数いただいた。ご執筆いただいた先生方に深く御礼申し上げます。

竜巻の被害で、何人もの人が亡くなった。その家族の心情を、マスコミは「やり場のない怒り」と表現した。「怒り」には必ず相手がある。やり場がないのであれば「怒り」とは言えない。それをあえて「怒り」と表現するところに、現代という時代に漂う特有の気分が表れている。

相手の定まらない感情は、容易に収拾することはできない。人々は、それを不条理と感じる。この不条理から自分だけの力で立ち直ることのできる人は少ない。そこに、何としても誰かの責任を問いたいという気持ちが湧き上がる。正義の名の下に誰かを責め続けられれば、その感情を「怒り」として収拾できるからである。

今、「いじめ」による生徒の自殺の問題で、学校の先生たちに「怒り」がぶつけられている。マスコミは、それを煽るように報道する。マスコミが繰り返してきた学校バッシングの続きである。

現代は、まず理想に価値が与えられる時代である。人々は、理想をいつか必ず実現できるものと信じ、それを求めて努力することが正義だと考えている。困ったことに、こんな考え方をすると、現実には必ず否定すべきところがあることになってしまう。だから、現実を罵るのがマスコミの仕事になる。現場が直面している問題を、浅薄かつ雑駁な知識で、結果だけから批判する。現実を引き受けている者たちを非難すれば、自分の正義を演出することができる。そして、その者たちを、「怒り」をぶつけるべき相手として引きずり出してくる。

その一方で、現実を他人に任せている者は、まるで「無垢なる聖性」を宿しているかのように、何の責任も問われることはない。それをいいことに、生徒の家族は、学校の先生を居丈高に非難する。普段から、身勝手な難癖をつけられるのはあたりまえのことで、給食費でさえ払わないと言い出す者もいるという。家族にも相当の責任があるのではないか。そのことに、誰ももうすうすは感づいている。しかし、マスコミは「無垢なる聖性」という仮構によって、大衆を甘えさせ大衆に迎合する。

責任を問われるのは、いつも現場で苦闘している者たちである。現実とはかけ離れた理想を求められ、それを実現していないと貶され、正義に反するものとして蔑まれる。そればかりか、「怒り」をぶつける標的にされる。マスコミは、そんな言説を垂れ流し、現実を引き受けている者をこっぴどく卑しめる。悪いことに、行政どころか司法までがそれに振り回される。

こんな状況は、現代という時代の病なのではないか。日々の真摯な営みを罵倒されてばかりいれば、現場に無力感が生まれ、社会に漠然とした不安が漂うようになる。このままでは、誰も現実に真正面から取り組もうとしなくなるのではないだろうか。